定年退官のご挨拶

1971年に着任して以来、じつに37年の長きにわたって、山口大学のお世話になってきました。大学院を修了してそのままの着任で、当時はまだ大学通りは舗装されておらず、このキャンパスにはたしか、教養部と二、三の学部があるだけで、市の中心部からの大学移転は完了していませんでした。農学部の辺では職員の方が「マムシ狩り」をしていたのを覚えています。当時はドイツ語の授業負担数が多く、着任早々に週７コマの授業と宇部高専の非常勤３コマをしていました。今思えばよくこなしたものだと思います。

当時の教養部はしかしのんびりしたもので、教官と職員でソフトボールなどして、いまから考えれば、あれだけの授業負担数の傍ら、よく暇があったものだと思います。みんな若かったし、楽しかった。辛いこともあったには違いないのに、いまでは楽しかったことしか、覚えていません。

個人的に大変だったのは、教養部が廃止され、平成８年４月に工学部・感性デザイン工学科に移行してからのことです。なにしろ学部ははじめてで、卒論指導・修論指導にかなりのエネルギーを割きました。工学部で人文系の卒論を書かせて、認められるのは大変なことで、何倍かの努力をさせないと認められません。「映画論」、「多重人格論」、「書字認知」など自分も初めての課題を、学生や院生と同時に研究スタートで一定の成果に持って行くのは、ほんとうに大変でした。しかし優秀な学生・院生に恵まれ、なんとか切り抜けてこられたのも、皆様のおかげと感謝しています。また授業も、工学部の学生に人文系の学科を教える難しさは、とても説明ができないほどです。

ドイツ文学者、カフカ研究者としての自分は、結局この年になるまで、単著を出すことができぬまま、定年を迎えてしまいました。自分の業績を見てみると、幾つかの空白期があります。それは着任後の３年、それから1982年から1987年の５年間、1997年から2003年までの６年間です。最初の３年の空白は、着任後ドイツ文学をを飯の種にするからには、端から端まで勉強しなければ、という強迫観念から、レッシング、ゲーテ、クライストなどの作品を読んでいたからです。しかしどんなに力んでもそう読めるものではないし、専門の論文も書けません。仕方なくカフカに戻って、論文書きに精を出すようになると、後は狭く狭くなっていって、なかなか領域を広げられませんでした。

1982年から1987年の５年間は、フンボルト奨学金を得て、ドイツに２年近くも滞在させて頂いた前後で、本来ならバリバリ書かねばならないはずが、かえってブランクになってしまいました。

しかしその後カフカ以外に、リルケをかなり突っ込んで研究し、なんとか二つの中心をもてるようにはなりました。ドイツからの帰国後、哲学や現代思想、精神分析にも手を出し、いろんな本を漁りましたが、いまではなかなかかつて読んだ本をもう一度読み返す暇が取れないで居ます。

1997年から2003年までは、工学部に移行して、そこに慣れるまでのブランクで、これもそれなりの理由があることはすでに述べた通りです。

自分の人生を振り返って、つくづく思うのは、自分が<めくら蛇に怖じず>、怖いもの知らずで突っ走って来ただけではないか、よくこんな自分が世間を渡ってこれたものだ、ということです。自分で自分の論文を読み直すと、色んな意味で衝撃を受けます。よくも恐れずにこんなことがことが書けたもんだ、とか、よくぞここに書き留めておいたな、いまではもう忘れてしまっているけど、よく踏み込んでいるなとか、まるで他人の論文を読むように、感心したり、恥じ入ったりしています。

みなさまと同僚でいられるときは、もう過ぎてしまいました。これからもお世話になりますが、今後ともどうかよろしくお願いする次第です。ただひたすら皆様のご厚誼と寛容さに支えられて、ここまで来られたことを皆様に心から感謝しています。末筆ながら、定年退官記念号を組んで頂いたことにお礼を申し上げて、筆を置かせて頂きます。

河　中　正　彦